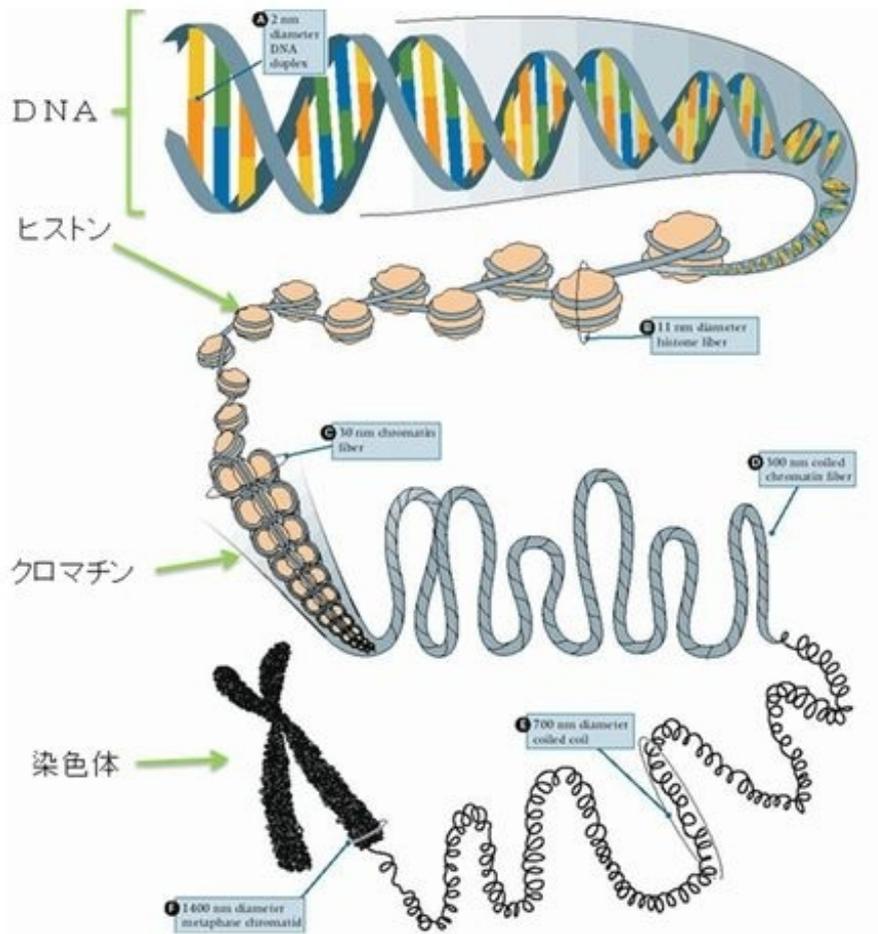


時間のかたち、 生命のかたち



ゆきの

「ねえ、君たち、時間ってどんなかたちをしてる？」

柳澤先生が研究員をしているとき、研究室の教授は生徒達にそんな質問を投げかけたという。

四角じゃないかとか、直線だとかいう答えが出てくる中で、柳澤先生は「らせん」といったそうだ。

——— らせん。

その答えは、「時間」という抽象的な概念であるものを、実にリアルに表現した言葉ではないか。

時計の針が円を描くように、一日はぐるりと巡っていくが、一周して戻ってきたところは昨日よりも少し先だ。ぴったりと同じところに戻ってくる時計の円の描き方とは、そこが微妙に違っている。一見して、同じところを回っているように見えるが、らせんというかたちは、重なることなく先へ先へと伸びているのだ。

今日という日は、二度と繰り返されることがなく、また新しい一日が始まり、季節が巡っては、去年とは似ていても違う、新しい一年がまた始まる。人は時間の経過とともに成長し、自分に似ている子孫を残して死ぬ。次の世代がまた、生まれ、成長し子孫を残す……。

時間という名のらせんは、一日、一年、一生、などといった区切りごとに集まって、新たならせんを生み出している。

ちょっと想像するのが難しい人は、お母さんが長電話しているときに指先でくるくるいじっている受話器のコードを思い浮かべて欲しい。



太いらせんを作っている線もまた、細いらせん状になっているのが分かるだろう。

私は、この形をよく知っていると思いだした。「生命（いのち）のかたち」ともいえる、染色体の構造である。（表紙参照）

よく知られている通り、DNAの鎖は「二重らせん」構造であるが、二重らせんはヒストンというたんぱく質にぐるりぐるりと巻きつき、さらにその鎖もらせん状に折りたたまれている。二重、三重に、らせん構造を繰り返しているこのかたちは、柳澤先生が想像した「時間のかたち」と何とよく似ていることだろう。

この酷似は、ただの偶然だろうか？ そんなことを考えているうちに、私は生命科学に魅了され、大学では1年のうちから遺伝子生物学研究室に入室した。日曜もない忙しきで精神を病み、ドロップアウトしたが後悔はしていない。何たって、時間のかたちなんてものをゆっくり考える暇も、エッセイを書く余裕もできたんだから。